

# COSMOS集



黄色の花 芳賀 テル子 福島

介護士による謎ときの時間あり固まる脳をほぐすと喜びて  
長生きは良く寝てよく食べ良く笑へと介護士さんに聞かされてをり  
語れない書けない読めないでも未だできることあり見える聞える  
ズッキーニに黄色の大きな花咲けりカボチャの一種と知りて納得す  
お裾分けと言ひて持ちくる羨豌豆となりのご主人の趣味の作品

図書館の扉 山口 清子 群馬

靴を脱ぎスリッパに履き替ふ図書館の番人のやうな体温測定機  
図書館の扉は重く厳めしくハリポッターひそみをやるやう  
リクエストで借りたる本は待ちしぶん並びて買ひしタイ焼きのあち  
酒を好み飯は食べない方代さんのやうなお人がそばにをります  
くるしくてたまらないとき方代さんの歌を読みます時間をかけて

枇杷は豊作 三宅 尚道 神奈川

届けらるる旅行ガイドの冊子本ページめぐりて行くことはなし  
ラジオより天気、ニュースを聞いてをり午前三時に朝刊がくる  
裏山に枇杷は豊作 忘れてた「揺籃のうた」声出し歌ふ  
おほよそは値引き商品買ひ求め同じく我も値引きされをり  
里山は削られ狸居場所なく港に人家に神出鬼没

夕風の湖 荒川 ゆみ子 東京

晴れた午後木綿のシャツに一艘のアイロンの舟進ませてゆく  
ひろやかにアイロンかければ夕風の湖となりたり木綿のシャツ

水上 芙季選

「あすなる集」特選

でっかい頭 小泉 京子\*北海道

可燃物をゴミステーションに運ぶ道ひと冬ぶりのおばあさんにあう  
カジカ汁作るもよいが睨まれるでっかい頭をガバツと割るとき  
うちの人牛飼いだつたよいまもなお朝の五時前スイッチ入る  
ぼかぼかの今日のお日様やさしくて十坪の畑の鍬入れをする  
一年を寝かせし生ゴミコンポストのほろほろ堆肥はみみずの稼ぎ

三百二十歳 川端 富起子\*宮城

具と味噌を変えて毎朝作る夫の味噌汁に今朝はピンクの蒲鉾  
唐突にチャンネル変える九十六の父と張り合う九十二の母  
古い父母と弟とわれ四人揃い三百二十歳の晩酌  
ワサワサと実家の庭にはびこれるわが化身のようなきみどりの露  
球場の晴天の下でビール飲み試合始まるまでのワクワク

街灯がゆがんで続く夜のみち奥に向かつて人帰りゆく  
街灯の届かぬあたり薄白くニセアカシアの息が揺れてる  
低反発まくらにあたまを沈ませて水底石の眠り思へり

大野 英子選

数の暴力

清水 佑太郎\* 東京

さあみなさん、テスト範囲はここまでです 拍手が起こる七限最中  
千円の採点用のペンを買い初めて書いた数字は十二  
答案の束を眺める二十二時三十分の数の暴力

採点用ペンのインクを交換し二百枚目の採点をする  
採点が終わった僕を褒めるのはオヤツが欲しい僕の犬だけ

庭の静けさ

塚 本 裕紀子 東京

この夏の寝ぐらにせむと尾長らがざわんと揺らす大きぶなの木  
施無畏印、与願印結ぶ仏像を蔵ひて閉ざすコロナ禍の寺  
鳥の来ぬ庭の静けさこのところ世界も静かと錯覚しさうだ  
献立を考へあぐねて捲りたり小口のやけた「おそうざい十二カ月」  
若き日に初めて求めし料理本しやうゆ色なり料理も本も

風を感じる

高 橋 梨穂子\* 新潟

半分に切ったキウイの切り口にじゅわりさみしさこぼれるようだ  
コップ、花瓶、わたしと地球 ただ水のいれものとして風を感じる  
にここにこときみが手にとるクレヨンをついはだいろと呼んでしまった  
のし紙を巻かれて胸を張っているカステラ我が家までよく来たね  
いつかまた心おきなくハグしたい思い出あふれる改札口で

夢のかけら

星 野 尚 子\* 新潟

日本人月面探査を目指してる夢のかけらがレゴリスとなる  
手書き文字はそつとオブラートに包む字面の強さに負けないように  
今日もまた貴方の熱いメッセージに収めシユレッターする  
処理をする道開かれずたまりゆく原発ゴミも私の怒りも  
教室に入れない子が彷徨つてエントランスで過ごす4限目

あ の 岡

山 本 竜 作\* 新潟

濁流の飛沫しぶきの眩し 小鳥らも惑い飛びかう雪国の春  
桜花池に浮かびて渦を巻く 宇宙の果ても渦を巻くらむ  
あの岡は青年期まで住んでいた岡 母と二人で田畑耕し  
生き甲斐は歌、囲碁、愛恋 平日は歌、休日は囲碁、愛恋成りゆき  
沖繩は暑かったなあ 青いバナナ、ひめゆりの塔、断崖の波濤

ひかりの水脈

内 藤 丈 子 福井

ももづたふ敦賀真鯛のカツバーガー白味噌和へのソースがうまし  
ブランド魚八百姫ひらめを食みたれば胸に若狭の潮がひろがる  
若狭なる湖畔にきらめく夏の陽をついばむごとく葦切は鳴く  
さくさくとたけのこの皮をむく朝は初夏のひかりの水脈みのあらはる  
あゆの稚魚初夏のひかりをひるがへし九頭竜川くづりゅうがはをぐんぐん進む  
松尾 祥子選

どちらでもない

高 橋 みどり\* 愛知

ひらがなを覚え初めにし幼子が「見てて」と書きぬ父の名あきら

来年の教科書選びに意見している来年はいないわたしは  
アンケート欄は「未婚」か「既婚」かの二択しかないどちらでもない  
家電話 回らない寿司紙の辞書、チョーク授業も早やマイノリティ  
職員の通用口の軒下で生れし一羽か つばくらめ飛ぶ

透 明 な 瓶 樋 田 由 美\*三重

並んでるメダカのベビーの揺り籠は変哲もない透明な瓶  
若草のシャツを着ている案山子の子マスク姿も雀に人気  
朝顔がやつと一輪咲いた朝 アマリリスひとつ枯れてしまった  
法面の枯草を焼く白煙 それを見上ぐる農夫の背と背  
若葉雨慈愛のように濡らしゆくセイヨウトチノキ キエフのシンボル

ち ひ さ き も の 糸 田 富美代 兵庫

穀物の産地と習ひしウクライナ今はいくさの惨状を見る  
天道虫こまつよひぐさ小型犬ちひさきものはなべて愛らし  
高齡を言ひて馴染の洋裁の材料店が二店なくなる  
見るたびに違和感おほゆ宣伝に見るにこやかな葬儀の場面  
朝の家事すませいつものドラマ見るかかる平穩ただ願ひつつ

飛 鳥 乙 女 友 田 昌 子\*奈良

山の辺の海石榴市の辺を人急ぐなんと(寿し政)の寿し桶持ちちて  
(紫は灰さすものぞ)問答歌たからかにうたう飛鳥乙女は  
木洩れ日に青き楓の風かよう金屋の石仏こつくり昼寝  
三輪山のふところに立つうま酒の大神神社に大き杉玉  
水たたえ水鳥の鳴く井寺池はるか二上山を望みて

芒 種 石 田 信 夫\*鳥 取

デイケアの職員に怒る杖振るう温和な母よ何が不安か  
葉やめ母は日に日に穏やかに笑みを浮かべて「ありがと」を言う  
芒種とは切なき節気コメ余り米価下がりがりて外米輸入  
生地三日寝かせてパンを作りたる山の工房の列に並べり  
線路わき朝の小雨を光らせる白のカラーに出会える入梅

背すじを伸ばす 中 村 恵\*鳥 取

垣根越しに光がとどく窓辺にてケトル鳴るまで背すじを伸ばす  
やわらかいガーゼに頬をあてたまま忘れていたことがあるけど  
頭から布団をかぶる 話しても話さなくても傷ついていた  
いいことが続いて起きてもうダメだこれからよくないことばかりだろう  
「癌だつて」スマホは聞いていただろうなのに末尾でえがお予測す  
水上 比呂美選

生命活動せよ 落 合 美代子 香 川

足元に出で来し百足の悪党をのがさずすばやく靴裏で踏む  
先生が生徒を叱りおらぶこゑ運動場より立ち上りくる  
グラウンドで野球部の君とぶつかりて一目惚れした高一の夏  
駅前の日曜市は店番をする人のみで人出はまばら  
目ざましが午前四時半わが脳に生命活動せよと騒ぎぬ

自然に宿る神 江 崎 玲 子\*福 岡

鯛ヒラメ大皿に盛り釣り人の父は夢にて刺身ふるまう

かあくわあとカラス会議が始まりぬ声の大きい者が勝つのだ  
陸上のプランクトンといわれおる油虫らは樹液に群がる  
北斎の富嶽三十六景にゴッホは自然に宿る神みた  
断捨離という言葉の恐ろしさモノに宿れる心つぶさる

短調が長調に

永田 恵美 福岡

どなたくが終はり日傘の数が増えもうすぐ長い夏が始まる  
区役所がとつても豪華になつたから見に行かうかな春に浮かれて  
眼を閉ぢて魚に戻りぬ身の内に海を感じる春の夜には  
葦ほど小さき人がをりさうで気をつけ気をつけ歩く春の野  
雨やみて短調が長調に変わるごと空が晴れゆき青が広がる

軋む音する

垣野 幸一 長崎

朝明けの海しずかなる港内に水脈を広げて釣り船帰る  
過疎化する小さき島の昼下がり浮き棧橋の軋む音する  
コロナにて閉店したる廃屋に有線放送の楽の音流る



田宮 朋子選

「その二集」特選

バラ 一枝

成田 裕子 \* 青森

便せんを開いたままで一向に進まぬ手紙 郭公の声  
包装紙リボン段ボール箱さえも愛おし君のプレゼントなら

水桶に汲み置かれたる清水をひたすら飲める馬の目やさし  
石段のうえに独りで住みいたる友は平地のビルに越しゆく  
父のかたち 新屋 希子 熊本

亡き父が気に入りさうで買ひ求むへブンリーブルーの朝顔の種  
抹香をつまむ指爪ほつそりと父のかたちが吾に残れる  
夕映えの空にまじりて紅を刷く合歡の花々たをやかに揺る  
梔子にかはるがはるに鼻をよせ初夏知るや男子学生  
ノースリーブの肩に残れる傷あとは種痘のしるし あら同世代  
あなどれぬ口 木場 美枝子 鹿児島

無花果はときをり短歌に詠まれをりされどいかなる味かを知らず  
カタツムリ汝の口はあなどれぬアマリスの頸を噛み切りたるとは  
あと少しも少し待てとするうちにあはれパイヤ鳥に喰はれき  
アカンサスとアガパンサスは違ふなりアガパンサスはわが庭に咲く  
中道操氏の歌集「人間の声」異次元よりの声と聞こえぬ

平日は気を使つてか隠れてるホコリが揃つて出てくる土曜  
毎朝の挨拶代わり小さめのバラ一枝をキッチンに挿す  
六月の庭に溢れるラベンダー清楚に見えてその遅しさ

滝、見に行こう

工藤 玲音 \* 岩手

「三百円ランチ！うめえ」と書かれある暖簾をくぐる漁師は老いて

囚人服めく館内着はらくだ色 本日のお風呂は薔薇の風呂

てのひらで豆腐切りつつみんなほどわたしは自殺を嫌っていない  
真つ黒な振り子へしがみつく夢が覚めて網戸にかけろうがいた  
サコッシュにスマートフォンと口紅と蛇の抜け殻 滝、見に行こう

簡体字、繁体字

長 瀬 慶一郎\*福島

お隣の白猫くんが庭に来るおかげか最近鼠を見ない

日本に住む人民をまもるため銃はもてぬが葉をはこぶ

中国の簡体字には不満あり(愛)(優)の字に(心)が抜けて

台湾の繁体字には(心)が(学)に(嚴)に(肅)とあり

原子炉が溶けるをメルトダウンという皆さん既に忘れてますね

店主の年

人 見 江 一\*神奈川

千畳敷カールの空を貫いてひたすら進む飛行機雲は

懐かしの洋楽ばかり流す店かなり近いぞ店主の年は

里山の道を歩けばすれ違ふ人みな会釈しわれ挨拶す

追憶の小町通りの露西亞亭初めて食べたピロシキ、ボルシチ

子を詠う父の遺した歌読めば子どもの吾にいつでも会える

へブル語

奥 浩 昭 東京

椎茸は(シイタケ)の名で売られをりセーヌのほとりトロワの市場

パンバンの(いち)白書をもう一度街にながれてほろほと聴く

鈴木との一杯の酒うまかりき塾のバイトの後の一杯

へブル語を共に学びしわが友は牧師退き介護士となる

六十で逝きし父は(SHINESE)をくゆらせ歌を数多残せり

狩野 一男選

蔵書始末

上野

成\*新潟

一行も読まざりしまま仕舞い置きし資本論三巻、紙ごみにする  
棚おくのレーニン選集十巻をヒモに結わえぬごみに出さんと

五十年前に求めし『神々の体系』いまに領き読みぬ

八割の蔵書始末し残りしは万葉、記紀の二十冊ほど

一冊がまだ見当たらず「東歌の世界」と題する根岸氏の本

初夏の風

斉藤 淳

子\*富山

鶉の巣より草むらへ落ちし雛に親鳥せつせと餌はこびくる

赤十字奉仕団への初参加緊張あれども心さわやか

母の日にプレゼントされしアレシメント月末はそつとバラに活け替う

女孫らと少し屈んでハイタッチかけつこはもう負けてしまった

初夏の風やさしくわれを包み込むコーヒーショップのウッド・デッキに

時の不思議

清水

由美子\*長野

早苗田に夕焼け映える帰り道ピアソラかけて車走らす

山も田も緑に満ちるこのときに麦実る時の不思議も満ちる

サンキヤッチャー朝の光を散らばしぬ光の粒は床にも壁にも

苗床に慈しむごと水をやる夫の横顔あなたでよかつた

日曜は留守がちな吾に夫ほそり言ううありがとね今日いてくれて

夏

小田

沙也加\*愛知

いつまでも夜にならずに奪うことが得意な季節やってくる 夏

水滴や夜を遠ざけられたまま蛙が初夏を喜んで鳴く  
桜桃忌 墓にいとつかないとかつて何年前の歌だったつけ  
油絵にサインを入れる心持ちで終わった旅行の写真眺める  
絶え間なく弾かれ続けるストリートピアノに男の子ら飛び跳ねて

七十で転職 田原五郎\*京都

人の世の移り変わりを知らぬげに源氏螢が乱舞するなり  
こんな世に僕は生まれて生きていた紫陽花の庭幻想の夜  
七十で転職すると決めたとき思い浮かべた北斎のこと  
1Fのボタンを押して吐息つくことまでの道ことまでの時  
人間は期間限定商品と言いつつ聞かせつつ今生きている

鈴木 竹志選

ひ い ぢ ぢ 新 敦子 鳥取

ハンドルを握る田植機進みゆく短き苗と足跡残し  
コンテナに良き音たてて積もりゆく小粒の砂つき根切りらつきよう  
手のひらにをさまるやうな竹かごをひいぢぢ編みき五歳のわれに  
弟の子守りする日は竹かごにひいぢぢ入れき飴玉ひとつ  
ひいぢぢのひぎに抱かれて見上げたる白くて長きひげのごはごは

「はるちゃん」 福田春子 福岡

雨戸閉ちひとりの夜にメール音チロリンと鳴り「月がきれい」と  
朝五時の遮光カーテンに透きて見ゆ六月朔日の穏しきひかり

通り過ぐる赤きバイクに手を振れば薫風つれて局員はターンす  
真つ白な近江縮みの夏ぶとん洗ひ上がりぬ明日は入梅  
「はるちゃん」と呼ぶ声のする同窓会 昼の集ひはひるまにはてる

幅広パンツ 石本洋子 佐賀

本棚の引き出し整理の収穫は写真一枚十五のわれの  
その場所をめぐるて夫との諍ひを避けてゴーヤの二株を植う  
夫作りしペットボトルの風ぐるま三度目の春つひに回らず  
ライバルは他人にあらずこのわれと気付きてふとも早足となる  
令和の代昭和の流行戻り来て幅広パンツ五十年振り穿く

ひとり占め 春野直子\*熊本

古希すぎし夫の頑固は燻し銀「そこちがうよ」と言いたきを吞む  
この川もこの街も全部ひとり占めだあれもない朝の散歩道  
どくだみの青白き花 十六の乙女のしるき首筋の色  
野良猫の集会場なる吾の庭に唐辛子撒く我は咎人  
猫よけのつもりで撒いた唐辛子芽生えて来たり梅雨のはしりに

スマホの動画 牧島幸造 鹿児島

籠や笊、父の遺作を見るたびに習はざりける悔いを飲み込む  
降る雨は「いつかは止む」とながめつつ畑の草取り出来ぬ悔しさ  
炊き立てのアツアツご飯には生卵わが家の定番パワーの源  
コロナ禍で会へぬ孫ともすぐ会へるスマホの動画老いの楽しみ  
早採りで食しておけば良かったと朽ちし玉葱手に取りて見つ